

■ PCN だより

PCN Volume 68, Number 4 の紹介

2014年4月発行のPsychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) Vol. 68, No. 4には, Regular Articlesが9本掲載されている。今回はこの中より海外から投稿された7本の内容と, 日本国内からの論文については, 著者において日本語抄録をいただき紹介する。

(海外からの投稿)

Regular Articles

1. Differences in psychiatric symptoms among Asian patients with depression: A multi-country cross-sectional study

A. H. Sulaiman, D. Bautista, C-Y. Liu, P. Udomratn, J. N. Bae, Y. Fang, H. C. Chua, S-I. Liu, T. George, E. Chan, S. Tian-mei, J. P. Hong, M. Sri-surapanont, A. J. Rush and the Mood Disorders Research: Asian & Australian Network

Department of Psychological Medicine, Faculty of Medicine, University of Malaya, Kuala Lumpur, Malaysia

うつ病アジア人患者における精神症状の相違: 多国共同横断的研究

【目的】本研究の目的は中国, 韓国, マレーシア/シンガポール, 台湾, およびタイ在住の大うつ病性障害(MDD)患者の5群において, うつ病の症状の特徴と臨床的特徴を比較することであった。【方法】精神疾患構造化簡易面接法に基づいて非精神病性MDDのDSM-IV診断基準を満たし, 向精神薬の投薬がなく, 同意が得られた成人(18~65例)を順次, 横断的研究で評価した。うつ病症状の評価には10項目のモントゴメリー/アスベルグうつ病評価尺度(MADRS)と, 13項目の精神症状評価尺度(SCL-90-R)うつ病下位尺度を用いた。さらに, 10項目のSCL-90-R不安下位尺度が記入された。共分散分析を実施し, 交絡因子として年齢, 中等教育の修了, 婚姻状況, 就労状況, 宗教,

指標エピソードの持続期間, およびうつ病の重症度について調整した。差の程度に関して, 臨床的有意性を表す最小エフェクトサイズとして0.10という閾値を採用し, エフェクトサイズ0.25を中等度と見なした。【結果】MADRSの4症状からこれらの5群が差別化され, 最も顕著であったのは「倦怠感」と「内的緊張」であった。SCL-90-R不安下位尺度8項目と同様, SCL-90-Rうつ病の9項目からも5群が差別化された。MADRSの倦怠感の項目はエフェクトサイズが最大であった(0.131)。残りの統計的有意差は0.10を超えなかった。

【結論】MDDはこれらの多様なアジア諸国の外来患者において, 差があるというより類似している。各国間の差は存在し偶然によるものではないが小さく, 様々な人種の背景をもつMDDのアジア人を対象とする研究で臨床医によるものや自己報告式の一般的な評価尺度を使用することは十分に可能である。

2. Benzodiazepine use and risk of stroke: A retrospective population-based cohort study

W-S. Huang, C-H. Muo, S-N. Chang, Y-J. Chang, C-H. Tsai and C-H. Kao

Department of Neurology, China Medical University Hospital, Taichung, Taiwan

Graduate Institute of Clinical Medical Science, School of Medicine, College of Medicine, China Medical University, Taichung, Taiwan

ベンゾジアゼピンの使用と脳卒中リスク: 住民ベースの後向きコホート研究

【目的】本研究の目的はベンゾジアゼピン(BZD)の使用と偶発的脳卒中リスクの関連の可能性について検討することであった。台湾の全国民健康保険(National Health Insurance)制度から入手した2000~2003年のデータを利用した。【方法】被験者は新たにBZDを使用した患者38,671例と, 年齢, 性別および

ベースラインでの併存症について BZD 使用者とマッチさせた BZD 非使用者 38,663 例であった。被験者は全員、脳卒中の既往がなかった。研究対象患者の各例は新たに脳卒中と診断が下される、もしくは追跡不能、死亡または保険期間終了により打ち切られるまで追跡した。研究は 2009 年末まで継続した。コックス比例ハザード回帰モデルを用いて脳卒中の発現率とハザード比 (HR) を推定した。【結果】出血性脳卒中の HR は BZD 群の方が非 BZD 群に比べて有意に低かった。20~39 歳の患者に関して、虚血性脳卒中の HR は BZD 群の方が非 BZD 群に比べて有意に高かった。BZD 非使用群と比べると、高齢層では BZD の年間投与量が少ない (1 g 未満)、または投与期間が短い (30 日未満) 患者ほど脳卒中リスクが低く ($P < 0.0001$)、全年齢層では BZD 使用の年間投与量が多い (4 g 以上)、または投与期間が長い (95 日以上) 患者ほど脳卒中リスクが高かった ($P < 0.0001$)。【結論】低用量での BZD 使用下では神経保護、高用量での使用下では神経毒性を示唆している可能性がある。

3. Increased subsequent risk of acute coronary syndrome for patients with depressive disorder : A nationwide population-based retrospective cohort study

Y-N. Lin, C-L. Lin, Y-J. Chang, C-L. Peng, F-C. Sung, K-C. Chang and C-H. Kao

Division of Cardiology, Department of Internal Medicine, China Medical University Hospital, Taichung, Taiwan

うつ病性障害患者は後に急性冠症候群を発症するリスクが高い：全国規模の住民ベース後向きコホート研究

【目的】本研究の目的は後の急性冠症候群 (ACS) 発症リスクとうつ病性障害の関連の可能性を探索することであった。【方法】今回の研究課題に取り組むため、台湾の全民健康保険制度から入手したデータを用いた。曝露コホートには新たにうつ病性障害と診断された患者 10,871 例が含まれた。各患者は指標日以前に ACS の既往がない一般住民参加者 4 例 (対照群) と性別と年齢について無作為にマッチさせた。コックス比例ハザード回帰分析を行い、うつ病性障害と後の ACS 発症リスクの関係を推定した。【結果】うつ病性障害

患者では、後に ACS を発症する全体リスクは対照群より有意に高かった (調整後ハザード比 1.88, 95% 信頼区間 1.63~2.17)。さらなる解析を行ったところ男性、高齢、または診断が他の併存症と同時に下された患者で高いリスクが認められたことが明らかになった。【結論】今回の住民ベース後向きコホート研究の所見は、うつ病性障害は後の ACS 発症リスク増大と関連があることを示唆している。

4. Prevalence of depression symptoms and serum levels of interleukin-6 in hemodialysis patients

B. Knuth, V. Radtke, P. Rocha, K. S. da Silva, F. Dalsóglío, M. Gazal, K. Jansen, D. O. Souza, L. V. Portela, M. Kaster and J. P. Oses

Laboratory of Clinical Neuroscience, Postgraduate Program in Health and Behavior, Center for Life Sciences and Health, Pelotas, Brazil

血液透析患者におけるうつ病症状の有病率とインターロイキン-6 の血清値

【目的】血液透析患者においてうつ病は最も多い精神病理学的状態として出現する。進行慢性腎疾患と透析の状態は慢性炎症という状態と関連がある。うつ病は炎症誘発性サイトカインの高値を特徴とする免疫系の活性化と関連付けられている。本研究では血液透析患者においてうつ病とインターロイキン-6 (IL-6) の関連の可能性について検討した。ペロタスのリオグランデ・ド・ソル州において 2011 年 9~11 月に血液透析患者 75 例を横断的研究に組入れた。アンケート調査から人口統計データを入手し、ベックうつ病質問表 (BDI) を用いてうつ病症状の有無を判断した。生化学的パラメータ、透析送達量、および IL-6 血清値を測定した。【結果】血液透析患者におけるうつ病の有病率は 48% ($BDI \geq 14$) であった。生化学的評価では、うつ病患者は尿素減少 ($P = 0.01$) と IL-6 ($P = 0.04$) 値上昇を示した。BDI スコアと生化学的変数間の相関解析では、BDI が尿素 ($P = 0.03$) ならびにカリウム ($P = 0.04$) と負の相関があったが、IL-6 値との間にはなかった。【結論】うつ病の血液透析患者は IL-6 高値を示したが、うつ病症状の重症度はこのサイトカイン値と相関はなかった。

5. Comparison of symptoms of delirium across various motoric subtypes

S. Grover, A. Sharma, M. Aggarwal, S. K. Mattoo, S. Chakrabarti, S. Malhotra, A. Avasthi, P. Kulhara and D. Basu

Department of Psychiatry, Postgraduate Institute of Medical Education and Research, Chandigarh, India

様々な運動性亜型間でのせん妄症状の比較

【目的】本研究の目的はせん妄の運動亜型と他のせん妄症状間の相関性を明らかにすることであった。

【方法】せん妄評価尺度 98 年改訂版とせん妄運動症状評価尺度修正版で、リエゾン精神医療に紹介されてきた患者 321 例を順に評価した。【結果】患者の半数は過活動亜型 (161 例, 50.15%) のせん妄であった。研究標本の 4 分の 1 はせん妄評価尺度 98 年改訂版とせん妄運動症状評価尺度改訂版で混合型の診断基準を満たし (79 例, 24.61%), 約 5 分の 1 はせん妄評価尺度 98 年改訂版とせん妄運動症状評価尺度修正版で低活動型の基準を満たした (64 例, 19.93%)。また、ごく少数の症例 (17 例, 5.29%) がこれらの 3 つの亜型のいずれの基準にも該当せず、亜型には分類されなかった。過活動型と低活動型を比較したところ、知覚障害、妄想、情動不安定、思考プロセスの異常、運動激越および運動遅滞の有病率に有意差が認められた。これらの症状は思考プロセスの異常と運動遅滞を除いてすべて過活動型で多くみられた。過活動型と比較して混合型は思考プロセスの異常と知的障害の有病率が有意に高かった。混合型の患者と低活動型の患者を比較したところ、知覚障害、妄想、情動不安定および運動激越の点で有意差が出現した。これらの症状はすべて混合型で多いことが明らかになった。せん妄評価尺度 98 年改訂版で評価した認知症状に関しては、異なる運動性亜型間で有意差は出現しなかった。【結論】せん妄の異なる運動性亜型は非認知症状で異なる症状を呈する。

6. L-3,4-Dihydroxy-6-[F-18] fluorophenylalanine positron emission tomography demonstrating dopaminergic system abnormality in the brains of obsessive-compulsive disorder patients

H-J. Hsieh, K-H. Lue, H-C. Tsai, C-C. Lee, S-Y. Chen and P-F. Kao

Department of Nuclear Medicine, Buddhist Tzu Chi General Hospital, Hualien

Department of Radiological Technology, Tzu Chi College of Technology, Hualien

L-3,4-ジヒドロキシ-6-[F-18] フルオロフェニルアラニン陽電子放射断層法は強迫性障害患者の脳においてドーパミン作動系の異常を明らかにする

【目的】強迫性障害 (OCD) は慢性の神経精神障害である。現行の治療モダリティには薬理学的方法や行動上の方法などがあるが、十分でないことが時にある。OCD の発症機序には中脳辺縁系のドーパミン作動経路が関与するとされている。本研究では L-3,4-ジヒドロキシ-6-[F-18] フルオロフェニルアラニン (F-18 FDOPA) 陽電子放射断層法 (PET) を利用して、OCD 患者の脳におけるドーパミン作動神経回路の異常の可能性を生体内で検討する。【方法】研究の被験者は精神評価後に募集し、参加に対して書面によるインフォームド・コンセントを得た。185 MBq の F-18 FDOPA を静脈内注射した 120 分後に、OCD 患者 5 例と健常志願者 6 例に F-18 FDOPA PET スキャンを実施した。統計的パラメトリックマッピングというツールで PET の結果を解析した。【結果】OCD の脳は健常被験者と比較して、左後帯状回、左楔部、左舌状回、右の楔部および楔前部、右舌状回、右中側頭回、左小脳、および右小脳 ($P < 0.01$) の亢進傾向に加えて、左前頭前運動皮質 ($P < 0.001$) でのドーパミン作動性の代謝亢進を示した。【結論】これらの脳領域におけるドーパミン作動性神経機能の亢進が OCD の発症機序において意味をもつ可能性を示唆している。

7. Predicting 10-year quality-of-life outcomes of patients with schizophrenia and schizoaffective disorders

M. S. Ritsner, A. Lisker and A. Grinshpoon

Sha'ar Menashe Mental Health Center, Israel Affiliated to the Rappaport Faculty of Medicine, Technion-Israel Institute of Technology, Haifa, Israel

統合失調症および統合失調感情障害の患者における生活の質の10年転帰の予測

【目的】本研究の目的は統合失調症および統合失調感情障害の人々において、ベースライン変数から10年目の自覚的な全般的な生活の質(QOL)転帰の良不良の予測因子を明らかにすることであった。ベースラインの臨床的変数、性格に関連した変数、人口統計特性、および背景特性を用い、10年QOL転帰が不良な患者と良好な患者を比較した。ベースラインのデータからの10年QOL転帰の予測にロジスティック回帰分析を用いた。患者108例がベースラインとその10年後にQuality of Life Enjoyment and Life Satisfaction Questionnaire, 陽性・陰性症状評価尺度(PANSS), Talbich Brief Distress Inventory, および心理社会的質問票に記入した。【結果】ロジスティック回帰によりQOL転帰の予測因子として、妄想的観念化〔オッズ比(OR)3.1〕, PANSSのgeneral psychopathology (OR 1.1), 強迫観念(OR 0.84), 敵意(OR 0.4), PANSS陽性尺度スコア(OR 0.4), およびgeneral QOL index (OR 0.4)の6つが明らかになった。このモデルによりこの標本の80.6%が感度(87%が正確に「転帰不良」と特定)ならびに特異度(71%が正確に「転帰良好」と特定)が良好と分類された。【結論】本研究は長期QOL転帰のベースラインでの予測因子の傾向を提示している。特定された予測因子は回復の可能性があり、それにより統合失調症および統合失調感情障害の人々のQOLを強化でき得る因子である。

(文責：木下利彦 PCN 編集委員)

(日本国内からの投稿)

Regular Article

1. Network analysis for motives in suicide cases : A cross-sectional study

Y. Shiratori, H. Tachikawa, K. Nemoto, G. Endo, M. Aiba, Y. Matsui and T. Asada

自殺既遂者の動機のネットワーク分析：横断的研究

【目的】自殺既遂者は様々な苦悩や動機を抱えているが、これらの動機が互いにどのように関連して自殺を生じているか報告した研究はほとんどない。我々は自殺者の動機間関係の構造を、ネットワーク分析手法を用いて抽出した。【方法】自殺動機を含む茨城県の2007～2009年の自殺既遂者のデータを入手した。同データから自殺動機を収集し、ネットワーク中心性指標とブロックモデリングによる構造分析を用いて解析した。【結果】ネットワーク分析の結果、自殺既遂者の動機の間では、「うつ」と「身体疾患」が次数中心性において比較的高得点であった。媒介中心性においては、「うつ」と「失業」が比較的高得点であった。ブロックモデリングによる構造分析では、動機は8つのブロックに分けられ、最も重要なブロックは「親子間の不和」「生活苦」「多重債務」などの8つの動機から構成されていた。【結論】うつと身体疾患は自殺既遂に対して重要で優先度が高いが、これらの2つの動機は自殺に対して、異なる影響をもっており、さらに、構造分析は、絶望感を引き起こすようないくつかの家庭内の問題と経済問題を含むブロックが本邦の自殺動機の中で重要な役割をもっていることを明らかにした。社会的観点から自殺に対する介入が行われる際には、結びつきやすい自殺の動機を考慮することが有用と考えられた。